

ポリポット植え ヤマユリ幼苗の育て方

この度は、ヤマユリ実生苗*の“里親”となって育てて頂けることになり有難うございます。

*実生苗（みしょうなえ）：種から育てた苗

日本固有種であるヤマユリは、野生のユリの中でも最も豪華な花を咲かせます。種から地上に芽を出すまでに1年半、更に花を咲かせるまで育つには、最低でも4～5年掛かります。



自然環境の中では、生育期間中の気候・環境の影響や病虫害などで自然淘汰され、地上に落ちた種が花を咲かせるまで育つ確率は千に一つとも言われています。また特に病虫害に弱く、生息地を選び、育てるのが難しく手間のかかるヤマユリとも言われますが、本来 里山等で育つ、山野草であるヤマユリの特性を知り、幾つかの育成上の注意点を守れば、全く初めての方でも花を咲かせるまで育てることが可能です。

あせらずに気長に適切な管理を心掛けて、是非 花を咲かせるまで育ててみてください。

ヤマユリの生育の特徴と育成上の注意点

ヤマユリが好む環境は、午前中は日が当たり午後には日陰となるような半日陰で、風通し
が良く、有機質に富み 排水性と保水性に優れた弱酸性の土壌で、湿度の保たれた環境で
す。

ヤマユリにとって、冬の寒さや夏の暑さは、休眠打破や球根充実のきっかけとして必要です。

◆特に高温、乾燥に非常に弱いので、強い日差しや、強い雨が直接当たらないような木陰や庇の下に置くとか、寒冷紗や不織布等で強い日射しを遮るようにします。

◆過湿にも弱いので、土の表面が乾いていても、指を差し込んでみて少し湿気を感じる程度で育てます。水遣り時には鉢の底穴から水が流れ出る程度にタップリと遣るようにします。

特に地上部が無くなる冬の休眠期でも、地中の球根は生きているので適度な湿り気を保つ必要が有ります。

- ◆鉢植えの培養土の表面を腐葉土等で覆うと、夏は乾燥／遮熱対策となり、冬は凍結（霜柱）防止対策になります。（ヤマユリは寒さには強いのですが、空中に押し出されると枯死します）
 - ◆排水性を考慮して鉢は直接地面の上に置かず、レンガやタル木、スノコ等に乗せるようにします。 葉や茎への泥はねを防ぐことは、病気対策としても有効です。
 - ◆培養土中の腐葉土が唯一の栄養分となるので、特に施肥の必要はありませんが、養分不足等で施肥が必要となる場合、液肥を通常の倍くらいに薄めて水代わりに遣ります。
 - ◆病虫害には特に弱いので、殺菌剤や殺虫剤（混合液にしても良い）を適宜散布*します。
- 薬剤使用をなるべく控えたい場合、虫よけ忌避剤として木酢液等の使用もお勧めです。
- 一旦、病気にかかった苗は治せません。他のヤマユリに病気をうつさないように、根周りの土ごと掘り上げて完全撤去・焼却処分します。（枯れてもウィルスは残っています）
- *発芽時、梅雨時、夏季明け時は要注意時期です。（※状況を見ながら薬剤散布）**
- ◆ヤマユリの苗ごとの生育状況には かなりばらつきが見られます。

ポリポット植えヤマユリ幼苗の育成

《持ち帰ったら、直ぐにやって頂きたいこと》



ポリポット鉢は薄く、実生苗の根張りも弱くて 外部環境の影響を受けやすいので、ポリポットのまま 一回り以上サイズの大きい鉢（5号*以上）にスッポリと入れるようにします。《二重鉢》

*1号が3cmなので、5号は口径15cmです。

外鉢の材質として 断熱・通気効果のある素焼きの鉢が最適ですが、プラスチック製でも構いません。 又、外鉢と内鉢の間は空隙のままでも良いのですが、赤玉土（小粒）を詰めるとより効果的です。 また二重鉢にする際には、重ねた鉢底の水抜け穴が塞がれないように注意します。 ◎写真は芽出し後、2年目の苗で1年目より大きな一枚葉となります。

《ポットの置き場所、置き方》

ヤマユリは強い日差しや暑さに特に弱いので、家の東側など午前中だけ日が当たる場所や、明るい日陰で風通しの良い処に置きます。 南向き等で日当たりが強い場合は、寒冷紗等の覆いをかけて日差しを調節するようにします。 特に寒冷紗等で鉢全体を覆うと、

日照調整のほかに、食害や病気を媒介する アブラムシやナメクジ等の虫除け効果も期待できます。乾燥にも弱いので、ベランダ等の風通しが良過ぎる処では 風除けや物陰に置くようにします。

湿気を嫌うので、ジメジメしたところや 強い雨の当たるところは避けて、水はけを妨げないように直接地面に置かず、敷石、レンガ、たる木、スノコ等の上に置くようにします。

鉢の高さを高くしてやることで、病気の原因になる泥はねを防ぎ、ウィルスを媒介するナメクジ等を寄せ付けない効果も期待できます。



※ヤマユリの幼苗は脆弱なので、必ず目の届く場所に置くようにします。

《水遣りについて》



地上発芽 1年目の幼苗は充分には根が張っていないので、表面が乾いたらたっぷりと水を遣るようにしてください。但し、過湿を極端に嫌いますので、風通しの良い場所に置き、乾いたらやる、乾いたらやる…を心掛けて、何時も湿っているような水の与え過ぎは絶対に避けてください。特に梅雨時や強い雨の時は、直接雨が当たらない樹木や庇の下に置くとか、雨除けシートを掛けるようにします。

※ 2年目以降は、苗が大きくなるに従って根がしっかりしてくるので、水遣りの間隔を徐々に空けるようにします。

《害虫予防と殺菌について》

病気や食害は治せません。予防が唯一の対策です。

アブラムシやナメクジの食害は株を弱らせ、ウィルス等の病気を媒介するので予防が必要です。特にヤマユリの若葉はナメクジの大好物です。春先から梅雨時までの若葉の頃は、オルトランなどの殺虫剤を散布します。（※展着剤の使用推奨）梅雨時などの過湿状態のときは、病気対策としてベンレート、ダコニールなどの殺菌剤を散布し



ます。（オルトランには、根回りに撒く顆粒タイプも有ります）

薬剤使用をなるべく控えたい場合、木酢液などの害虫忌避剤の使用をお薦めします。

※上記の殺虫剤と殺菌剤の水和剤同士は混合使用が可能なので、普段は混合液で散布すると一回の散布で済むので便利です。《希釈割合や混合可能かは、必ず説明書で確認要》

《肥料について》

元来、山野草であるヤマユリに施肥は不要です。自然界では土の中に混ざり込んだ腐葉土などの有機成分が唯一の栄養分となります。

但し、赤玉土が土壌内のリン酸分を吸い取り、未完熟の腐葉土が窒素飢餓や発酵ガスを発生させて、植物の生育を阻害する可能性があることから、人工的な管理育成の一環として最低限の施肥を行うという考え方もあります。（例：マグアンプKの小粒を撒くなど）

※生育不良など、養分不足等で何等かの栄養分を与えたい場合は、液肥を通常の2倍(例：ハイポネックスの場合では4000倍)に薄めて水代わりに施肥します。

《堆肥は雑菌が多く、病虫害被害の原因となるので絶対に避けます！》

植え替えて、苗を大きく育てる

ヤマユリは根域を制限されると生育を阻害されます。

その為、花を咲かせるまでの大きさの球根*に育てるには適切な時期の植え替えが必要になります。

*開花球と呼ばれる 重さ15g程度、ピンポン玉を一回り小さくした程度の大きさの球根。

今年、来年は現状の鉢で育苗を続けても構いませんが、苗（=球根）を大きくするには植え替えが必要です。

来年の秋（10～11月頃）、地上の葉が枯れたら 2.5倍程度の大きな鉢に植え替えま

※古い用土の使い廻しは連作障害の原因ともなるので、必ず新しい用土を使用します。



◎上の写真は芽出し後、3年目の苗で茎立ちしています。

夏以降に、一旦 地上部が枯れますが、地中の小球根は生きていますので、地中の湿度を保つために冬期の水遣りを欠かさないようにします。 来年はもう少し大きな一枚葉が出芽しますが、出芽数は自然淘汰で2～3割減となり、更に翌年には当初の半数程度になります。

※今年の秋に 球根は米粒大のラッキョウ形（重さ：0.6～1 g）となり、来年の秋には2～5 g、3年目の秋に10～30 gになりますが、一般に個体差が非常に大きく、特に鉢やプランターでは 更に生育が遅くなる傾向があります。

植え替え方法は色々ありますが、簡単で根傷みの少ない方法を紹介します。

《用意するもの》

●前年のポット鉢よりも、2.5倍程度以上の大きな鉢やプランター等

※材質は問いませんが、鉢底の穴が大きくて 水はけの良いものを選びます。

（鉢底の穴が 小さい、少ない場合、ドリル等で底に穴を明けて使用します）

●赤玉土小粒 ●完熟腐葉土 ●鉢底石か赤玉土大粒 ●殺菌剤（ベンレート、ダコニールなど）

※植え替えに用いる土は、必ず 無菌の新らしい用土を用いるようにします。

《植え替えの手順》

1. 前年使用した古鉢の上土を、球根を傷つけないように注意しながら、割りばしや竹へらなどで薄く少しずつ取り除きます。《細いヒゲ根を傷つけないように注意》
鉢を傾けると容易に用土を崩せます。

※鉢の中に小さな球根が出来ているのを確かめます。

（右下の写真、白く見えるのが小球根）

2. 新しい鉢に鉢底石か赤玉土（大粒）を薄く敷き、その上から赤玉土（小粒）3：腐葉土2の混合土を、小球根の3～4倍+1cmの深さまで入れます。



3. 細根を傷めないように、絡んでいたらそっと離しながら、なるべく根周りの土ごと取り出して、古鉢の2.5倍以上の大きさの新鉢に株間を4cm程度は離して根を拡げるようにして置きます。
4. 株の回りのすき間に赤玉土（小粒）3：腐葉土2程度の割合で混ぜた混合土を充填します。更にその上に覆土として、球根の大きさの2～3倍程度の深さで混合土を被せます。
※ウォータースペースとして、鉢の上部1cm程度は必ず残すようにします。
5. 鉢の上から殺菌剤(ベンレート、ダコニールの500倍水溶液)を散布する。



6. 鉢植えの場合、毎年、晩秋の休眠期に徐々に鉢*
を大きく替えながら、上記の作業を繰り返し替えて株
を育てます。

*菊鉢と呼ばれる、鉢が深くて鉢底がメッシュ状になっている鉢が排水性・通気性の面から最適です。

《株(球根)の大きさに見合わない大きな鉢は、培養

土の無駄使いになります》

※芽出しから3～4年後、茎立ちが15cm以上になったら庭に定植しても大丈夫ですが、連作を非常に嫌うので過去3年以内にヤマユリを植えていない場所に植えます。

《3年目以降のヤマユリ株の植え替えは、別途『ヤマユリ植え替え講習会』資料*を参照してください》

*麻生区ホームページの、麻生ヤマユリ植栽普及会の『ヤマユリ植え替え講習会』紹介ページ上に使用資料(PDF版)が貼付されていて、ダウンロード出来ます。

【推奨参考図書】

新特産シリーズ ヤマユリ -球根の増殖と花の楽しみ方、自生地復元-

農山漁村文化協会 編著者 小俣虎雄

《主にヤマユリ農家向けに書かれた書籍なので、ヤマユリ愛好家には少し専門的過ぎる内容となっていますが、充実した実践的な記述内容で非常に参考になる書籍です》